東京都交友会　秋の大会　一般公開講座

近代日本社会の創造者　渋沢栄一

講師　井上　潤　氏（渋沢史料館館長）

ただ今ご紹介いただきました東京北区飛鳥山にあります渋沢栄一の終の棲家になりました、飛鳥山邸の跡に建ちます渋沢史料館の館長をしております井上でございます。本日は、このような会にお招きいただきまして、大変光栄に存じておりますと同時に、日頃から私共、渋沢栄一の事績・思想についてお伝えしていくのが本務となっておりますので、そういう場を与えていただいということでは、また改めて、ここで感謝を申し上げたいと思います。

渋沢栄一という人物については、もう皆さん十分ご存じの方々がお集まりだと思いますが、今、前にお示ししましたのは、これはいくつぐらいの渋沢栄一だと思いになりますか。数え70、古希の時の写真なんですね。この写真を実は私どもから2018年、すぐ近くにあります国立印刷局にお貸しました。「昨年お借りした写真のことで、ちょっとお話したいことがあります」ということで、昨年の4月6日の日にお電話をいただきまして、そこで、最初は、財務省の係官だとか、印刷局の担当の係員が参りまして、「日本のお札というのは、20年に一度偽造防止等のために改刷をしているんですよ」という話から始まりまして、「今度改めて作られる新一万円札に渋沢栄一が決まりました」ということで、4月9日に記者発表がされまして、一気に渋沢栄一に目が向けられたというところであります。

それから少したちまして、水面下でドラマ化の話は、もう相談にも乗っておりましたけども、「9月9日の夕方5時10分という時間に発表します」ということで、NHKから連絡をいただきまして、来年の大河ドラマ、放映日が2月14日に決まりましたと。主人公に渋沢栄一を取り上げたということで、今日の私の忙しい流れが見えてきたわけですが、昨年の4月以降、世の中は働き方改革ということで、皆さん大いに叫ばれておりますけども、私の働き方も逆の意味で大いに変わってしまったというところでは、渋沢栄一のお陰というふうに思っているところであります。

渋沢栄一という人物、長くは実業家としての顔が代表的なところとして理解されているところでもあります。ただ、本当にそれだけなのかというのが、今日のお話のテーマにもなっていくかと思います。東京都ということで、お話をさせていく上では、もう欠かせないのが、板橋のほうにあります養育院の話。渋沢栄一は、社会福祉事業にも非常に奔走し、尽力をした社会事業家、福祉事業家、慈善活動家としての側面を大いに持っているところでもあります。

また、商業教育、実業教育、女子教育というようなふうなところを中心に、自らも教壇に立ったこともございますが、教育事業の推進者として、やはり、これからの担い手を作らなければいけない教育者としての側面。また、諸外国との関係を維持するために、民間の立場で外交面に尽力したという民間外交家としての役割、こういういろんな顔を持つ、その大きな渋沢栄一が今回、総合的に評価されるようなところで、最高額の一万円の肖像に決まってきたんではないかなというのが、私の思うところであります。

さて、今日、その渋沢栄一について限られた時間ではありますけども、生涯を振り返ると同時に、渋沢栄一がいまだに目を向けられるその理由といったところを、ちょっとご披露させていただければなというふうに思っております。

渋沢栄一という人物、1840年、天保11年の生まれです。実は今年、年男3回目の還暦を迎えたということで、生誕180年の年を迎えたんですね。そういう年頃の人であるということ。そして、実は、昨日が命日でした。満91で亡くなるんですけども、昭和6年、1931年満91で亡くなりまして、来年が没後90周年ということで、そのぐらいの年代の人であるということを、最初にお伝えしたいと思います。

生まれましたのが、現在の埼玉県深谷市、当時の国名でいきますと武蔵国榛沢郡血洗島村という、非常に物騒な名前の村に生まれております。

群馬県と県境を接する埼玉県北、北関東の一農村、その農家の長男として、この世に生を授かった渋沢栄

一なんですけども、こういう表現で多くの伝記が書かれているのは、もう間違いないところなんですけども、何の予備知識もなくそれを読んでしまいますと、「幼い頃から農作に明け暮れして、苦労を重ねていく中で、その努力が実って後世に名を遂げたというような感じで、渋沢の人生を描いてしまわれる方がいらっしゃるかもしれません。果たして、そうなのかというところ。渋沢栄一というような人物が生まれ育った、その埼玉の県北の地域というのは、どういったところなのか、というようなところを見ていきたいと思います。

ここに2万5、000分の地形図を基に出しております。1番から7番まで主だったところをポイントしました。7番がJR高崎線の深谷駅。そこから西のほうに2キロほど行った4番という番号が付いているところが、血洗島という現在の集落になる。今でも血洗島という地名は残っております。この血洗島を中心に見ていきますと、北に利根川が流れています。1番ですね。農村地帯の川が流れて、風光明媚なというような感じでお考えになるかもしれませんけども、実は、当時はまだ物の輸送というのは、船を使った舟運が中心だった時代の大動脈が村の北を流れているというふうに思ってください。

その村の流域には、河岸といいまして、その荷物を上げ下ろしし、それを取り扱う多くの商店、問屋が建ち並ぶ非常に栄えた町場がありました。2番というところに中瀬という地名がありまして。中瀬河岸。今の地形図でいくと、流域からちょっと離れたようなところにありますけども、その河川に非常に接したところで、中瀬河岸という非常に栄えた町場がありました。

そして、今度は集落から南に目を転じますと、今、5番、国道17号というのが通っていますけども、これは旧中山道。これも江戸時代の主要街道の1つで、大動脈ですね。その街道筋には宿場というのがありまして、恐らくこの深谷駅周辺、今でも市街地の印が付いているようなところになりますけども、深谷宿という渋沢栄一が生まれた頃の人口でいくと、約1、900名、近江商人が土着したと言われるようなところがありまして、多くの商店、問屋が建ち並び、本陣、脇本陣、旅籠が建ち並ぶ。非常に栄えた町場がありました。

今、申し上げたとおり、人・モノ・カネが絶えず行き交う交通の要衝の地、そして、地域経済の要衝の地に挟まれた地域でもありました。人や物や金が絶えず行き交うと同時、それに付いて回るような形で、江戸からもそんなに遠くないようなところで、江戸の文化・情報といったものもいち早く流れ着くというようなところで、非常に先端を行くような状況でもありました。

農村地帯なんですけども、安定した耕作地が得られない。水田がほとんど取れないところだったものですから、江戸時代というのは、主な税は米で納めるんですね。「米社会」と言われた時代に、米が取れないものですから、この周辺を治めていた岡部藩と言いますけども、その藩を治めていた安部（あんべ）という領主は、早い時期から金銭をもって税を納めるシステム、金納のシステムを取っていた、というようなところで、貨幣経済というものも早くから慣れ親しんでいる。

農作を担う農民たちも、農作だけで生業が立たないものですから、諸職業に手を出す。この地域は実は、藍染めに使う藍の葉が多く採れる地域。武州藍というものが多く採れておりました。それを加工しまして藍玉という染料を作って上州、信州のいわゆる百姓紺屋に売りに行く。これが非常にお金になった。軌道に乗せた家々が富裕層に育っていくというような中で、早くから貨幣経済に慣れ親しんでいる。

また、商業活動も活発に行われているというところでは、北関東の一農村というひとくくりではくくれない近代化を推進した人間が生み出される、そういう土壌がここにあった。先進性を帯びていたような地域に、渋沢栄一は生まれたのではないかというようなところを、最初にお伝えしたいと思います。

栄一の父親が本格的に藍玉の商売をして、非常に経営をうまく進めていきます。厳格な父親だったようです。その経営の後ろ姿を見ながら、父親の背中を見ながら、渋沢栄一も13歳、14歳ぐらいから家業を手伝っている様子が伺えます。まさに、家の家業を手伝う中で、経済だとか商売の勘を養っていった。実践を通して身に付けていった人。

海外の研究者の中には、「渋沢栄一というのは、どこの学校を出たんですか」「どういう研究をして、それを実践に生かしたんですか」というようなことを言われる方はいますけども、「そんな人ではありませんよ。むしろ、農業活動をした家の長男坊として、家業として進めていた藍玉の商売等に精を出す。その手伝う中で、実践を通して身に付けていった経済感といったもの

がある」ということでお伝えさせていただいています。

実際に、こういう帳面が残っています。これは嘉永5年のもので、明治の4～5年までの取引の様子が見て取れるんですね。実は、こちらに、ちょっと小さくて見えないと思いますけども、真ん中辺りに「代栄一郎」という文字が見えるんです。これは父親の代わりに信州の上田地方の紺屋さんに集金に行っている渋沢栄一が代わりに、代理で行ったということが証明される物なんですね。こういったところからも、渋沢栄一が家業に精を出していたというようなところが見て取れるかなということが感じられます。

この帳面等から分析すると、最高の売上高のお客さんが585両、そして、最小の売上高は5両2分という、非常に差があって、まばらに散りばめられているような感じで見て取れるんですけど、平均して1軒で1年大体100両の売り上げが上げられていたかと。取引先が大体100軒あったというふうに推定できるので、そうすると、1年に1万両の売り上げ、ちょっと書き過ぎているところはありますけど、今の1億円に近い売り上げを上げられるような家として成長してきているのが、先ほどの帳面等の分析からも見て取れる。やはり、藍玉の商売によって財を成していく家々。

実践を通していろいろ学んでいったというようなことを言いましたけども、それ以外にも教養、学問というものが必要な家の人間たちでもありましたので、学問にも触れておりました。渋沢栄一が5・6歳ぐらいの時に、父親からまず漢籍を教わっています。『大学』『中庸』、そして、『論語』の一節まで父親から教わったと言われています。

それから、1年程たったところで、隣村に尾高惇忠という従兄の漢学者がおりまして、この人から教わるほうがいいだろうということで、隣村まで毎日日参し、いわゆる私の塾に通うような形で、渋沢栄一は教育を受けておりました。

この尾高の教え方が、ちょっと変わったようなところがありまして、当時は漢籍を与えて、それを徹底的にまず素読させる。そして、解釈をしっかり加えて、一字一句暗記させるというような読書法が主流だった中で、「こっからここまでは大体このようなことが書いてあるから、あとはじっくり読んで自分で理解しなさい」というようなことで、とにかく前へ前へ進めさせる。そして、その文献を終わらせて、次へ次へと数多くの文献に触れさせたい。与えられたテキスト、その漢籍を読むだけじゃなくて、興味関心があるものだったら何でもいいから読みなさい、というようなことで、渋沢栄一も読書好きだったというところで、例えば、『南総里見八犬伝』のような小説の類も数多く読んでいたようですし、『十八史略』などのような歴史書の類、日本や中国の歴史書も数多く読んでいるというようなところもありました。

また、当時、渋沢栄一が生まれた年が、中国でアヘン戦争が起こった年。西洋列強の脅威を必至と感じつつ、攘夷という考え方がより広まりつつある中で、攘夷という考え方にも染まっていくところも見て取れます。

ここに示したのは『交易論』と言いまして、その学問の師、尾高惇忠が書いた攘夷文献です。それを渋沢栄一自身も20歳前後で書き写して、絶えず読み続けようというようなことの意識が、感じられるようなものになっています。渋沢も尊王攘夷思想にかぶれていきます。

また、父親に談判して、江戸へも遊学したいというようなことを言っています。海保漁村という人の漢学塾に学んだり、千葉道場で剣術を学んだりもしています。渋沢からすると、さらに学問を深めたいとか、剣術を身に付けて強くなりたいというような思いがあったのは間違いないのですけども、一地域で思い描いている自分のその考え方、得られた情報というものが、どういうものなのか、こういった江戸に出て、塾だとか道場に通うと、いろいろなところからいろんな考えを持った人たちが集まっている。そういう人たちとの議論の中で、自分の思い描いている考えが、どういう位置付けにあるのかを確かめたい。そんな思いもあって、江戸への遊学を試みているところがあったように思います。

いろんな人との交流の中で得られたのは、「あ、同じじゃないか。攘夷の考え方を持っている人間が、これだけ数多くいるんだ。官尊民卑の打破を訴えようとしている世の中を改めたいと思っている人間が、これだけいるんだ。だったら、一緒に手を組んで、何か行動を起こしませんか」ということで、思いついたのが、文久3年という年。

まず、高崎城を乗っ取りましょう。譜代藩の堅牢な城です。人数を集めたんです。江戸で知り合った仲間、それから、村へ帰りまして、近隣諸村の若者たちに声を掛けて、大体60名から70名ぐらい集まったそうです。それぐらいの人数で、普段

は鍬（くわ）や鋤（すき）を振っている人間が、刀等そんなに振り回したこともない人間が、その譜代藩の城に駆け込んで、その城を落とせるというふうな思いが、まず浅はかなところではあったんですけども、それぐらい強い思いを持って、世の中を改めなければいけない、という観念に駆られていたようなところがあります。

もう一つは、そこで武器が調達できれば、横浜に足を運んで、外国人居留地を焼き討ちするという、また、これも無謀な計画です。その時の決起文が残っています。「箱館・長崎・横浜に住居をいたす外夷の畜生どもを残らず踏み殺す」と書いてあります。それぐらい強い思いを持って、その行動を起こそうというようなところがありました。家に迷惑を掛けてはいけないということで、勘当してもらって、着々と準備を進めていくのですけども…。

先に示した尾高の教授法によって、渋沢栄一は情報というものに敏感になります。渋沢栄一の事績を振り返るにつれ、小さな失敗はいくつもしているかもしれませんけども、人生の岐路に立った時、大きな選択に迫られた時というのは、本当に慎重に、できるだけ数多くの相反するような考え方の情報も全部かき集めて、その中から自分の指針を導き出しているというようなところがあります。

まさに、この暴挙を実際に実行しようといった時にも、いろいろな情報がかき集められました。たまたま従兄が京都にいて、同じような行動をした人たちの姿を見てきているんですね。これを実行しても無駄かもしれない。世の中が同じような行動によって変わったとは思えない。攘夷の意は表されているとは思えない。それよりか、その行動を起こした人たちが、無駄に命を落としているところしかないと。そこで気が付いたのが、学問の師である尾高であり、渋沢栄一だったのです。

自分たちは、ここで一石を投じて世の中に何か波紋を起こす、影響を与えるようなことを起こせるかもしれないけども、世の中を改めるということが、自分たちの最終的な目的である。ここで命を落としてしまうよりか、どういう形であれ、長く生き長らえて、この世を改めるという道筋を選んだほうが、得策であろうというようなことで、結局は、この暴挙を中止にしてしまうんですね。

とはいえ、当時の警察権力からも、もう目を付けられているところがあるので、しばらくは村を出て身を隠さなければいけない、というようなところで、もう根無し草のような状態になった百姓姿で旅をしたところで、あっという間に捕縛されてしまうだろう。殺されてしまうだろう、というようなところで、江戸に遊学している際にスカウトをされていたんですね。徳川御三卿の一家、一橋家の用人・平岡円四郎という人物が、面白い人物だということで、渋沢栄一に「一橋家に仕官しないか」というようなことで声を掛けた。それをうまく活用したのです。最初は断り続けていたんですけども、いざ根無し草の状態になった時に、家臣という名目さえもらっておけば、多少なりとも安心・安全で旅をすることができる。身を隠すことができるだろうということで、その名目をもらって西へ西へということで旅をしておりました。

そのたどり着いた京都において、その一橋家の当主であった一橋慶喜に謁見をしまして、正式に家臣となる。もう下働きから始めていますけども、そこで渋沢栄一は、いろいろ実力を発揮していきます。当時、一橋慶喜というのは、禁裏御守衛総督というようなことで、御所を守る役割を担っていました。その警護に当たるには一橋家ちょっと兵力が弱過ぎないか、ということを、渋沢がまた言い出したのです。生意気な青年だったようです。

その人間の意見を基に、領地内、いろんなところに飛び地のようにあった一橋家の領地内から、百姓から兵を集めてくれれば、あっという間に1、000人近くの人が集められるかもしれない。それによって、この護衛もしっかりできるようになるだろう、というようなことで、その任務を与えられて、まずは備中の国、今の岡山のほうから始まって、各地を巡って農兵募集の旅に出ております。

いろいろな苦難の道を歩むんですけども、それを乗り越えまして、480前後の農民を集めまして、それはそれで成功裡に導いた。ただ、それだけに収まらなかったのです。渋沢栄一は、行く先々でいろいろな情報に触れて、例えば、今の兵庫県辺りに行くと、木綿が多く採れる地域があるのです。ただ、農民は大阪の商人と直取引をして、安く買いたたかれて、あまり成果が現れていない。

ちょっと目を転じると、すぐ近くの村に姫路藩の村がある。姫路藩は、藩として1つの仕法を組み立てて、農民からできるだけいい値段で買い取ってあげていると、農民も高く買い取ってもらえるということでは、

生産意欲が湧く。また、木綿の質が上がる。それがまた循環しまして、いい利益が上がるというようなことになる。一橋家もそういうふうにしたほうがいいと。また、その流通機能を高めるために、姫路藩では藩札のような物を出している。同じようにやってみたらどうかというようなことを進言する。米の質が高いので、それを年貢米として江戸に回すだけではなくて、領地内に灘だとか西宮に酒造家がいる。その人たちに売るということを考えれば、質の高い酒ができ、地域も盛んになるし、一橋家の財政を潤す基になる。硝石という火薬の基、これを商品化、製品化することによって、一橋家の財政を潤す基になる。そういう財政政策案を、次から次へと立案していく。それが基で、非常に一橋家も成果を上げて、渋沢栄一も重きを置かれていく。

そうこうしている内に、当主慶喜が将軍になる。その時に、フランスから声を掛けられていたのが1867年パリの万国博覧会。そこに出品要請、そして、使節団の派遣要請ということで、将軍自らが国を離れることは、ちょっと危険だったので、慶喜の弟、まだ13歳、14歳の弟、昭武を名代に立てまして使節団を送る。その庶務・会計係として渋沢栄一が抜てきされているのです。やはり、そういう才能を見抜かれていたというようなところがありました。

渋沢栄一は、ついこの間まで「攘夷、攘夷」というふうに叫んでいた人間ですが、ヨーロッパに行ってほしいと言われると、「はい、そうですか」ということで受けているんですね。何か、一見すると節操のない人間のように思われるかもしれませんけども、いい言葉があります。柔軟な頭の持ち主なんですね。いろいろな情報をかき集めていますので、その時々の状況に適応する能力が高かったというふうなことが言えるかと思います。

新しい世を築きたいというふうに思いを変えた時には、思考の変換が既になされていて、それならば、できるだけ先を行った先進国の文明文化にも触れてみたいというような思いにも駆られているところに、ヨーロッパ行きが巡ってきたので、それは喜んで飛び付いたというようなところがあるかと思います。

実際に、横浜を出立しまして、2カ月ほどかけて各地を転々とする中で、一つ取り上げたいのが、スエズ運河に差し掛かった時のことです。彼らが通過しようとした時には、まだ運河は開通しておりませんでした。大開削工事の途中でした。スエズからアレキサンドリアというところまで500～600キロのところを鉄道で移動しています。鉄道という輸送手段自体も非常に驚きを感じています。「こういうものを、ぜひともいち早く日本にも導入すべきだ」ということを言っています。

もう一つ感じたのは、鉄道の車窓から見えた大開削工事です。どこの国の政策としてやっているんだろうと思ったところ、実は、レセップスという人間が起こしたフランスの会社が、一企業が請け負ってやっている仕事なんだと。会社とは何だ。資本をみんなが出し合って、そういう事業に対して投資される。それの集められた資本を投じて、大事業が成し遂げられる。また、そこから得られた利益が、公平に分配される。渋沢栄一がそれを名付けて、資本を合わせると書いて、「合本法」だという言い方をします。その仕法が一番良いというふうに彼は感じたのです。独占したその企業主だけに利益が集まるのではなくて、出資してくれた人間それぞれが、この事業自体に自分も携わったというような意識を持たれ、その事業が成り立っていくのだと。

また、もう一つ感じたのは、これは、ここで得られた利益、そのレセップス社という会社に利益がもたらされるのは、もちろん間違いないところなんだけども、それ以上に、その500～600キロの運河が開通することによって、ヨーロッパからアジアのほうに向かうために、それまではアフリカ大陸、あの喜望峰の先をずっと巡っていかないと行けなかった。経費も時間もかかっていた。それを実に短縮、縮小できる。世界中の人々に、どれだけ大きな利益をもたらされるのか。さすが先進国の人々の考えることは違う。公の益というものを非常に考えられているというところを、渋沢はその時に感じたようなのです。

後に、渋沢は「公益の追求者」というような言われ方をされます。まさに、その公益というものを意識した渋沢の考え方、こんなところにもちょっと原点が見いだされるかなというところがあります。

公式行事等を終えた後、ヨーロッパ各地の視察、巡歴の旅も行っております。その中で1つご紹介したいのが、ベルギーへ行った時に、ベルギー国王と、栄一は控えの間にいたと思いますけども、昭武が会っているんですね。ベルギー国王は、その時に言ったのは、「国々の繁栄、産業化、近大

化においては、鉄が絶対必要なんだと。日本もそういう時代が来るだろうから、その時は、製鉄国ベルギーの鉄を買ってほしい」というふうに言われますね。渋沢栄一は、その話を聞いて、13歳、14歳の少年に何言ってんだ、というふうな感じで聞いたということもありましたし。国王自らが商売に口を出すんだということは、目からうろこだったんですね。

日本じゃとても考えられない。もう卑しいこと、卑しい人としか見られなかった商人、商業というようなものに対して、国王自らが、今で言うトップセールスを行っている。国を強くするというのは、決して政治力、軍事力じゃないんだな。基盤となる経済力、産業の振興が、そこにあるべきなんだ。それを、官も民もないんだと。一体となって国のことを思い、国のために奔走するというような世の中、いわゆる渋沢が望んでいた官尊民卑が打破された世の中、それの理想的な姿をここで見たような気がいたしております。

本来ならば、４～５年向こうで留学というような形であったんですけども、幕府が倒れました。また、昭武が水戸藩主を継がなきゃいけないということで、２年足らずで帰国してまいります。静岡に赴きます。なぜかと言うと、慶喜が将軍職を解かれた後、静岡の宝台院で蟄居状態にありました。そこで帰国の報告をし、もう役人にはなりたくない、という気持ちを吐露して、ヨーロッパで産業の振興の意味を非常に強く感じてきて、そういう事業に携わりたいんだというようなことを言っておりました。

ちょうどその頃、政府のほうでは、各藩に貸付金をしておりました。静岡藩も53万両、年３分の利子で、13カ年賦返済というような手法で貸し付けられていました。その返済法ということで、渋沢栄一は役所に行って聞きます。無駄に政費に費やしてしまうと、破綻してしまって藩自体が破綻してしまうと。自分はヨーロッパへ行って合本法という仕法について学んできた。それによって、事業を立ち上げれば、その利益から返納ができるし、また、その事業によって静岡の町が栄えるし、産業の振興につながっていくんだというようなことで、実際に商法会所というのを立ち上げるのです。今の銀行業務と商社を兼ね合わせたようなものになります。その規則書、今の会社の定款のようなものまでまとめております。

そういう成果を放って置かなかったのが、明治政府です。出仕しろということで命が下ります。民部省租税正（みんぶしょうそぜいのかみ）、今の主税局長のような役割で、明治２年11月に着任します。いろいろ訳あって、本当は早く辞めたかったのですけども、上司の大隈重信からも説得されて、国のために奔走できる。また、産業振興のためは基盤整備が必要なのだ、そのためには、しばらくは、この役割を担わなければいけないということで請けたのである。それならば、新しい政策を考える。今でいうプロジェクトチームのようなものを作ってほしいという条件を出したのがきっかけで「改正掛」というものが設けられて、そこの掛長に就任します。

改正掛というのは、民部省の中に設けられて、２年間しか存続しなかったのですけども、ありとあらゆるものに手を付けています。今の私たちの生活のベースになっているものは、形は後になるとしても、ほとんど手を付けたといっても過言でないぐらいです。

例えば、近代的な郵便制度。これが集配だとか料金の一覧表であります。それから、これは大蔵省職制というもの。大蔵省、その前は建物はどういうものがいいのか。それぞれの中にどういう部署を設ければいいのか。それぞれの部署の中で、どういう事務を執ればいいのかということを、まとめていたりもします。それから、貨幣制度。円・銭・厘という統一した単位での貨幣制度を設ける。また、アメリカの制度に倣って、国立銀行条例といったものにも目を向けていきます。

また、これからの事業を会社組織を広げていかなければいけないということで、そのマニュアル本のような『会社弁』だとか、『立会略則』というようなものを発行されたりしています。あの世界遺産にもなりました富岡製糸場なども、改正掛の発案の下でまとめられたものになります。

改正掛で取り上げた案件が２年間で約２００件、どれだけ精勤ぶりで彼らが仕事を成し遂げたのかというところは、見て取れるんですけども、そのかいあって、明治の開化錦絵等に描かれるさまざまな場面、例えば、郵便ができ、鉄道が敷設される。銀行が確立される。教育が整備される。町が都市化が進められる。そういうような様子が、その改正掛の労力の下で形作られていったということが見て取れるかなという気がいたします。

ただ、明治政府の中にあって、軍備費拡張を主張する人たちとの意見の対立から、上司の井上馨と共に辞表を

たたきつけて、潔く官を辞してしまいます。それ以降は、ずっと民間を貫き通しました。

その最初に手掛けたのが、産業の振興のために必要な金融基盤の確立ということで、国立銀行条例の成立の下で、立ち上げられた第一国立銀行の総監役。これは国立とありますけども、実際は私立。三井、小野、島田という大資本家。一般の株式募集もし、株式会社として立ち上げられたものになります。それが、苦難ありますけども、軌道に乗ったところで、これからの世の中を会社組織で事業を立ち上げなければいけないということで、初期の頃には、製造業として抄紙会社、今の王子ホールディングス、その工場を持っていったのが渋沢栄一が晩年住んだ、現在私どもの館のある北区王子になります。その地名を取って王子製紙というふうに名付けました。

そして、もう一つは、あの三菱のように財閥を築かなかった。独占を嫌ったのです。岩崎弥太郎との意見の対立は、当時からもよく語られるところがありました。ただ、岩崎とも協力をし合うところもありました。経済発展のために結び付くところでは、同じように手を携えているところもあったのです。ただ、進め方が違う。独占で、自家の利益をまず最優先に考えるのではなくて、世の中全体の公の益を求めるのが渋沢流だったというところです。

個別の企業だけじゃなくって、民間の意見の結集の場所として、現在の商工会議所の基、証券取引所や銀行協会の基などにも目を向けて、財界形成というようなところにまで見ていったところがあります。

生涯渋沢栄一が関係した会社の数を数えますと、約500になります。これを自分で経営しようと思ったら、とてもじゃないけど無理ですね。それを渋沢流で成し遂げられたのです。企業を世の中に定着させる。合本で、そして人材を整えて軌道にのせるよう導き、自分は一歩引いたところで指導的な役割を担うと、そういうようなことに徹していたところがあります。70を機にほとんどの役職をリタイアしまして、実業界からは、正式には引退をする。ただ、何かあれば、すぐに応答するようなことは取っておりました。

じゃあ、その後は悠々自適かと言うと、そうではありませんでした。一つは日米関係の悪化の改善に向けて六大都市の商業会議所会頭たち、特に若手の経営者・技術者を連れ立って51名からなる「渡米実業団」という経済ミッションの団長としてアメリカに渡っています。現地の人ときちんと対話ができて、お互いの気持ちを理解し合えれば、変なぎくしゃく感は取り除かれて、その日米関係の悪化というのは解消されるだろうというふうに思っておりました。

また日米関係だけじゃなくて、アジアの人々、ヨーロッパの人々との関係も導いておりました。また、第一次世界大戦が終わった休戦記念日、それが11月11日で、縁がある日となったのですけども、その日に愛宕山の放送局へ行って、第一次世界大戦が終わった翌年から、ラジオを通じて平和を訴える演説などもしてまいりました。渋沢栄一は、国同士の関係の維持・改善というようなところに目を向けて、また、国際社会に日本をしっかり位置付けるために民間外交に奔走したのです。

もう一つは、福祉の事業です。この中には、養育院のほうでお仕事された方もいらっしゃるかもしれません。その原点たるところが、渋沢栄一のスタートにもなります。世の中は、産業振興ということで、会社がどんどん立ち上がってきて、産業化・工業化が進みます。渋沢栄一は、それによって皆が豊かな生活ができて、より良い社会へと向かうと思っていたところが、貧富の差、格差が芽生えてきます。日常の生活に付いていけない。ドロップアウトしてしまうような人々が生まれてくる。そういう人たちを底辺から手を差し伸べてボトムアップする。フォローアップするというようなことが、必要なのだと。福祉の事業に非常に重きを置いています。

渋沢栄一というと、どうしても銀行というような形で目を向けられるところがありますけども、銀行に関わるのが明治6年。養育院と関係するのが明治7年。最初は財務関係で関係していたのですけども、そのほぼ同時期なんですね。決して、その実業の世界で成功したから、その後社会福祉へというふうに目を転じていったということではない。同時並行に日本の社会を見定めていた。その福祉というものに対して、意識を高めていって、何とかこれを残さなければ、永続させなければ本当の意味での良い社会、本当の意味での産業振興に立った世の中にはなっていかないのだ、というようなことで、亡くなるまで、約60年近く養育院に関わります。初代の院長ですね。そのほかにも、医療機関等にも協力をしています。

そして、もう一つは、教

育。人づくり。自分が作った世の中をちゃんと担い手を育てなければいけない。森有礼という、後に文部大臣をする人間がアメリカのビジネススクールをまねて作った商法講習所を立ち上げたのですけども、本人が清国（中国）の公司として赴任しなければならなくなり、それを引き受けたのが営繕会議所から東京会議所、これは実は、よく商工会議所と間違われるんですけども、今の東京都議会みたいなものなのです。

そこの会頭を務めていた渋沢が、商法講習所を拠点に、大学昇格まで持っていくべきだということで奔走しました。文部省との軋轢（あつれき）に立ち向かっていったわけです。うまく導けまして、東京商科大学、今の一橋大学に導きました。また女性の高等教育。鹿鳴館時代に社交界で通用する女性をということで、伊藤博文、勝海舟などと立ち上げた女子教育奨励会。そこの実践校たる東京女学館。そこの館長理事長を務めたりします。

それから、日本女子大学校。これの総合大学化を目指すということでも非常に奔走しまして、第三代目校長、亡くなる年です。亡くなる半年ぐらい前に三代目の校長を務めて、あいさつをしたりしているところがあります。

先ほど生涯関係した会社の数が約500と言いました。それとは別に、社会事業の数を数えますと、約600となります。

1人の人間が1、000以上の数の事業に携わっている。それを、うまく世の中に永続させるようなシステムを残していった。そういう人だったということで、1931年、昭和6年11月11日、今年で89回目の命日を昨日迎えたのですけども、亡くなって11月15日、青山の斎場で葬儀が行われ、谷中の墓地に埋棺されるというところになります。葬列を見送る何万という人々が、深々と頭を下げている姿を見るにつけ、一民間人を見送る姿とは思えない。どれだけ惜しまれて亡くなった人なのかなというところを強く感じます。

今、中国においても渋沢栄一が書いた『論語と算盤』というのが飛ぶように売れています。儒教の儒に商人の商と書いて「儒商」という概念を広めようとしている研究者のグループがあって、その国際会議が持たれ、私も参加させてもらっています。その儒商のモデルが日本の渋沢栄一だというふうに言われているのです。

その渋沢も、西洋流の文明文化を取り入れて、近代化を推進させた人物でもありますけども、その根本的なところでは、東洋の伝統文化、儒教精神というものが、今、評価されるところでもあるのですけども、貫かれていたというようなところが注目されている。

それから今、社会貢献事業というと、本務の事業で利益を上げて、そこから得られた利益を社会還元するために寄付をしたりというようなことで、何となく社会貢献事業と本務がちょっと乖離してしまうようなところもあるのですけど、渋沢栄一は、実は、CSRというような言葉でもあるそのRのレスポンシビリティ。本務自体をしっかり責任を果たすこと、これが一番の社会貢献なんだというようなことを言っています。そういう本質を突いた社会貢献の先駆者、渋沢栄一が注目を浴びているということです。

最後に2つ取り上げます。今、各地でいろんな災害が起こります。渋沢栄一も関東大震災の被害者の1人でもありました。とにかく何か災害が起こった時、役人の指示を待つんじゃなくて、民間の力を結集して、その災害に立ち向かっていくというような、その復興の姿を主張し続けた人でもありました。

また、復興と言うと、何かしらなくしてしまったものの挽回で、物質面の復興を望む人たちが多くいるかもしれません。ただ、実際のところ、その災害に遭った人たちの付けられた心の傷、これはなかなか癒えるものではありません。本当の意味での復興は、人の心、人心の復興なんだということを言い続けた渋沢です。そういう意味では、仁義道徳による行動が、真の復興につながるんだということを主張し続けたということを、今改めて、この災害が毎年のように各地で起こる、そういう中にあっての渋沢の精神というものを、もう一度、今日もお伝えしたいかなというふうに思うところであります。

あとは、地域、地方の振興というところでは、各地、各所が、それぞれの要素、要因をちゃんと導き出して、その繁栄策を考えなければいけない。決して、首都東京に、また、大都市に人口が集まって、それが世の中全体の繁栄なんだということを言っているようじゃ、これは間違いなのだと。人間の体だってそうだろうと。人の頭の中に血が全部集まったら、それは決して健康な体ではないと。手や足の指先までちゃんと血が流れ、一つ一つの細胞が活性化されて初めて健康な体になるんだ。国自体もそうなんだと。一つ一つの地域が、まさにそこに住む人たちも、

自らの土地に対しての目を向けて、自治意識を持って、その活性策なども、よそで成功したから自分のところでも同じようにやろう、そんなことではなくて、その土地に合ったものをちゃんと見いだして、その政策を立てるべきであるというようなことを言っていたということを、ちょっとお伝えさせていただきました。

渋沢栄一、実業家であるというようなところの評価は、なかなか拭い去れないようなところがあります。今日のお話の中で、ご理解いただければ幸いなんですけども。それ以上に、日本の近代化、近代社会を築き上げてきた創造者。クリエイターでもありますし、その全体をうまく組織化したオーガナイザー。オーガナイズしてきた人であるということを、今日お示しさせていただきました。

それと、何と言っても、決してこれによって、自分が豊かになるというような思いで奔走したことではなく、世の中全体が豊かになる、公益を追求し続けた渋沢栄一であるということをお伝えしたいと思います。政治より経済の優位性を説いておりました。また、官尊民卑の打破を標ぼうし続けた人でもありますけども、官と民が対立の構造にあることを望んでいた人ではありません。官と民が一体となって進まなければ、より良い社会にはならないんだということを感じていた人でもあります。その時に、民間の人間が、どうしても官に委ねてきて、自分の立場というのは、あくまでも補完的な位置付けでしかないという、そういう思いを拭い去らなければいけない。

むしろ、民間の人間が世の中をリードしていくんだ、先導するんだというぐらいの気概を持って事に当たらなければ、本当の意味での日本の発展、国際社会への貢献にはつながらないんだということを、主張し続けた人であるということを、最後にお伝えしまして、私の今日のお話をしめくくりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。